

多中心社会の動態学における方法上の諸問題

高　野　洋　志

岡山理科大学教養部

(昭和61年9月30日 受理)

I. はじめに—複数の国家を含む地域社会の浮上

アフリカ及びアジアにおいて、かつて植民地化されていた地域の大半は独立し、世界地図は大きく塗替えられた。そして、独立運動の最盛期において、これらの地域の住民をとらえた、すべてを可能にするような情熱の高まりや、「第三世界」が世界史の前面に登場し、新しい価値観をもたらすという期待または、恐れや不安も、現在に至っては、ほぼ沈静化し、関心は、「発展途上国」と呼ばれるに至った国々に生じつつある、より具体的な問題に向けられている。

複数の国家が成立していても、地理的、歴史的共通性を持つ地域は、当然のことながら、政治、経済、社会的に、共通の悩み事を抱えている場合が多く、国際関係上敵対的であるか友好的であるかを問わず、地域社会における相互関係の密度は、飛躍的に増大していると云える。これらの地域社会は、これまで、かつての植民地本国との経済的文化的関係や、「東西」の政治的関係の背後に隠されてはいたが、それぞれ固有の特徴を持ち、一概に「南北問題」という観点から論ずるには、あまりにも差異の幅が大きすぎる。しかし、そういう特殊性を越えて、地域社会の直面する困難の解決と今後の発展へと道筋を探すために、比較検討の軸となる歴史的なモデルを用いて、同時代であるがゆえに視点が接近しきる欠点を克服する必要がある。そのためのモデルのひとつが、不可避的に、西欧社会とならざるを得ないのは、R. BENDIXが云うように¹⁾、普遍的なひとつの進化しかないとする考え方方が今日に至って、もはや通用しなくなつたにせよ、社会科学上の概念や用語が、やはり西欧に由来しているからである。

西欧社会は、ローマ帝国にキリスト教という共通項で描かれる地理的広がりの上に、複数の政治、経済及び文化の中心を成立させることで、国民国家群社会の制度と理念を最初に生みだした。現在の新興国は、西欧に由来する国民国家の理念のもとに建国し、最初からその理念の支配的な国際秩序の中に発展の道を探すことを強いられている。はたして、これらの新興国を包括する地域社会が、西欧のような社会にこのまま「進化」していくのか、あるいは、西欧社会がその近代史で体験し、実践してきたことを繰返さなければ同じ

成熟度に達しないのか、今後新興国の側からも、西欧社会の側からも問われ続けるに違いない。従って、西欧社会は、良い意味でも、悪い意味でもモデルとならざるを得ない。しかし、複数の、国家に類する政治的軍事的単位を含んだ地域社会のモデルなら、最初に国民国家群社会を形成した西欧にとっても存在したのである。そのうちのひとつは、聖書に描かれた、エジプトを含むオリエントの地域社会であり、もうひとつはイスラム文化圏で保存され、イベリア半島を経由して西欧に入ったアリストテレスの著作等に描かれた古代ギリシアのポリス社会である。かつての聖書の舞台は、今日においても政治的に極めて不安定な地域であり、一方のギリシアについては、ポリス時代の広がりはないものの古代に連なる文化と歴史観の上にひとつの統一国家が成立している。こうした例を見るならば、各地域社会は、それぞれその過去にモデルを求めており、その過去に拘束されるか、その過去を克服すべき対象としているのであるし、全く別のモデルを求めることがあるのだから、何も西欧にのみモデルとしての役割を求める事はないのは当然である。一時的であるにせよ、西欧の植民地となった際に、歴史認識の中心が西欧に移されてしまっていたのを取り戻すことで、これらの地域社会はその歴史的連続性をも取り戻し知識と経験を蓄積する中心を確立する。また、多くの民族運動が、それぞれの歴史観を確立して、初めて可能になるのをみれば、複数の「民族」を含む地域社会は、当然複数の歴史観のぶつかり合いの場であると考えてさしつかえないだろう。

II. 動態社会学理論

新しい国際社会の状況に対応して、巨視的な動態社会学を構築する試みは1960年代に始められている。なかでも、「社会進化」を社会体系の分化と再統合の過程としてとらえようとするT. PARSONSの方法は、この領域の研究に大きな影響を及ぼしている。これは、社会概念の基本単位に「行為」を置き、相互行為の分化した諸体系からなる全体社会を想定する点で、M. WEBERの社会学の直接的継承であると同時に、「原始的」、「古代的」、「中間的」、「近代的」という各段階の設定²⁾や、自己完結性の高い社会モデルを完成させた点では、H. SPENCERや、最初に動態と静態の区分を行ったA. COMTEの古典的進化論の系統に連なっている。一般に社会理論は、精密であればあるほど、特定の人間観を表現する結果となる。構造や機能という側面から社会システムを規定し、いわばひとりでに動く社会変動モデルを作ることは、M. WEBERのようにペシミスティックな近代人間像を抱いている場合は、慎重に回避されていた。G. BALANDIERは、整合性と均一性を前提とした社会システムを考える限り、社会変動の真の要因はみい出せないとしている。彼に従えば、社会システムは常に誤差を含んで成立しており、その誤差というのは、社会組織の不均質、機能する仕方や必要とする時間のずれのことであり、制度と適用されるべき

現実のあいだのずれや、諸システム間の不調和や対立のことでもある。この誤差を含み、相違を再生産していく性格に、社会変動の内的要因を求める一方で、たとえば、植民地と本国との関係や国家間の関係は、政治、軍事および経済の領域で、長期にわたる大きな社会変動の外的要因を作り、これを無視してはいかなる社会も考えられないことを彼は強調しており³⁾、内部の動態学と外部の動態学の結合を目指す。

確かに、現代においては、理念上、国家と国民社会はその広がりの上で一致しており、内部力学と外的関係の力学を区別して考えるのに都合のよい仕切りを国境が作っている。しかし一般的に、国境は、自然の障壁と一致するか、よほど軍事的緊張がその両側を支配していない限り、完全に閉鎖されることはない。国境の実態は、その歴史をみると、物理的な壁であるより、政治的、軍事的妥協や合意の産物であり、経済システム及び法秩序の境界として、住民に国家とその中心への向心的態度を強いる範囲を定める機能を持つ。国境を挟む地域社会の連続性は、特別にコントロールされてはいても存続する場合が多い。またイデオロギーや宗教の伝播には、国境が決定的障害となり得たためしがなく、他国内に特定のイデオロギーを広めている中心が存在するのはごく一般的現象であり、むしろ今日においてはどの国家もある程度は自国の政治的イデオロギーや文化を他国内に浸透させる努力をしている。それは外部に向けてというよりも中心から周辺に向けてという行為であり、国境自体はさほど重要な意味を持たない。

最初に、複数の国家を包括する地域社会が成立しつつあることを強調したが、これは決してその地域が国境によって仕切られつつあるのではなく、複数の政治的軍事的中心が確立され、相互関係を密にしつつあるという意味である。その点では、アリストテレスの考える自足的単位としてのポリス⁴⁾と今日の、互いに他国の中に存立の根拠を広げようとし、経済的にも自給自足の不可能な国家のイメージは著しくことなる。後者の相互依存性や相互浸透性を前提とするなら、動態社会学におけるひとつの大きな社会単位として、政治的に多中心である地域社会を対象とする必然性が存在する。

社会システムに内在する変動要因として、BALANDIERは差異が再生産される構造をあげていることをすでに述べたが、M. WEBERにとってはこのような社会変動が良い結果を生み出すとは到底信じられなかった。「墓より立ちあらわれ」た「多くの神々」の「永遠の争」⁵⁾という表現で、価値観の多様化を指摘した彼は、社会変革の強力な契機にカリスマの登場と、その価値観が支配的になる場合をあげている。地域社会の多中心性や多様性に帰因する変動に対し、ある破壊力を持つカリスマの登場とその支配の拡大は全く無関係ではない。そういった点も含めて、歴史に例を求めつつ、多中心社会の動態学の可能性を検討してみよう。

III. 歴史的多中心社会

地球の表面を任意に切取り、そこに複数の政治的中心や文化的な中心が存在するといつても、「多中心的」という表現を使用できないのは当然であるが、複数のそうした中心を持ちながら、地理的、歴史的、あるいはまた別の共通項により、ひとつのまとまりを形成している社会をその空間的広がりも含めて厳密に定義することはあまり容易ではない。中心がひとつだけなら資料を得るにもその中心ですむだろうが、多中心社会ではそうはいかない。まず、その社会がひとつのまとまりを形成している確実な証拠が必要である。たとえば、国家的中心が複数存在する場合には、文化的なひとつの単位を成すことが確認でき、逆に文化的に複数の中心が存在する場合には、政治的に統一されているというような内的凝集力に支えられている事実である。ここでは、政治的に多中心である社会に限定して考えることにするが、問題の社会の構成員が、自らが所属する社会の呼称を共有し、外部からも同じ集合体をひとつの名で呼ばれる場合はそこにひとつの社会単位が存在する重要な証明となり得る。しかし、実際に、シユメール、インダス文明、中国の殷社会初期等の都市国家群社会を例にとると、代表的な中心都市をいくつかあげることはできても、周辺部の広がりまで正確につきとめるのはむつかしい。古代ギリシアのポリス社会にしても事情は同じである。周辺部では所属意識はあいまいで、境界線は常に変化していたことがわかっている⁶⁾。多中心社会の変動を考える際、この広がりの不定形さ、周辺部の著しい社会変化は大変重要な意味を持っており、動態社会学上、たとえ資料が少なくとも、代表的中心のみを語ることでは社会全体の特徴を説明できない。

歴史のはじまり、文字の使用、「文明」と呼ばれる極めて鮮明な飛躍は、人口の集中度が高まったときに可能となった。城壁内にみいだされる神殿、教育設備、市場、工房や整った衛生設備等は、都市国家の出現が、社会組織の技術上でも大きな飛躍であったことを意味する。社会変化は城壁内に限って生じたわけではなく、人口や物資の集中は広大な、背景となる空間に生じたのであり、いわば周辺域の支配によりはじめて都市国家の存立が可能であった。農耕や牧畜のための空間と商業ルートの確保に、政治的軍事的手段も相応の発達を遂げた。古代都市国家の社会構成は、殷墟から発掘された多数の殉死者や、モヘンジョ・ダロで発見された人骨の多様さをみると、すでに重層的であったようだ。古代ギリシアでは、先住民族を農奴とした、スパルタを典型とするドーリア系ポリスの例もあるが、アテナイのように古くからのアッティカ住民が「聚住」(シノイキスモス)によりポリスを作った場合でも⁷⁾「アテナイ人は、ペルシア勢がたて籠るストリューモーン川河畔の都市エイオーンを包囲攻撃して降伏させ、住民を奴隸にした。……次にエーゲ海の島スキユーロスを攻め、此処に住んでいたドロップス人を奴隸にし、自分らの植民地した。」という記述⁸⁾を読むなら、戦争捕虜の奴隸化、その売買は少なくともこの頃は当然の

ことであった。

社会変動因としての奴隸制や階級関係については、それが古典的テーマであり、多くの議論があるが、ここでは触れない。むしろ、敗北が死か奴隸化を意味するという緊張を前提として、内政と外交、軍事がどう結びついているか、歴史としては語られても、動態社会学としては、扱われることがあまりなかったので、この点を検討してみよう。

「多中心的」という言葉は、機能の違う、たとえば、宗教の中心、経済の中心、政治の中心等がひとつの社会の中に空間的に分散して存在する場合に用いられるのと、機能の同じ、たとえば政治の中心が複数分散して存在する場合に用いられるのとでは、全く意味が異なってくる。前者では、「多中心的」であることが必ずしもその社会に緊張関係を生み出すとは限らないが、後者においては「多中心的」であることは、そのまま変動因を生み出すといえる。そこで、政治的中心性を持つ社会では言語や文化という内的凝集力以外に、その社会がひとつのまとまりを作っている証明として、逆説的ではあるけれども、対立や対抗という緊張関係、友好、同盟という関係の密度の高さがあげられる。この関係密度の高さは、社会変動の説明にとって大変重要な意味を持つ。なぜなら、それまで「外」に位置すると考えられてきた地域に政治的中心が誕生し、それとの対立や同盟関係の密度が高まるに従って、「内」と「外」という意識の中にあった境界も、人的物的流通サイクルの境界も取去られていくからである。またこの関係密度の高まりが、文化的均一性を作ることにつながる場合もある。

都市国家群社会に限らず、政治的多中心社会では内政と外交はきわめて密接な関係にある。古代ギリシアでは有力な政治家は同時に有能な軍の指揮官でなければならなかつた。一戦闘に敗北して追放処分を受けた例は数多い。そしてポリスの戦闘力を弱める政治制度は廃止され重装歩兵制度という特異な構造を生み出した。

ポリス社会全体の内と外という視点では、ペルシアとの戦争で終始一貫した立場をとり、イオニア諸都市を救うことになったアテナイが、ギリシア社会全体からその功績の評価をうけ、その後の地位を築き、またペロポネソス戦争に敗北した時さえ、その功績からポリスとしての存続を許された事実は、非常によく知られている。ペロポネソス戦争はトゥーキュディデースの記述から、全容が知られているが⁹⁾ 多中心社会内の政治力学を知る上でこの上もない資料を提供している。臨接するポリス間の対立、あるいは貴族派と民衆派の内戦等、局地的抗争が長期化した時、対立する相方がそれぞれわが方の勢力を優位にしようと努力する結果、最終的には、ペルシア戦争後のアテナイ対スパルタという最有力ポリス間のライバル関係にそれらの局地的抗争が吸収されていく過程が浮きぼりにされており、アテナイやスパルタのほうは、旧敵であるカルタゴやペルシアに友好関係や同盟を結んでしまうことで、せっかくペルシア戦争で得た権威を消費していく過程が描かれて

いる。その結果ペルシア戦争中にはペルシアの側についたマケドニアやテーバイの台頭を、ペロポネソス戦争後に許すことになった点も、政治的多中心社会の力学を知る上で大変参考になるだろう。先進的な多中心社会内部における大きな抗争の発生とその長期化は、周辺地域にも大きな変化をもたらす。まず物と富の流れは、ペロポネソス戦争の際には、デロス同盟に蓄積された資金が、兵士の入件費だけでなく、遠方での軍船建造用木材買いつけ、兵器用金属の買いつけに使用され、周辺域を富ませる結果を導いた。また、それまで周辺域に送られ、商業路確保や、植民地の建設保護にあてられていた軍事力が、他にまわされることで政治的、経済的動きを容易にし、新しい中心を生み出すのを可能にする。ただしアテナイは、この点には極度に神経をつかい、直接対決を避けて、同盟ポリスの離反を防止することに専念したので、戦争の利益を蒙ったのは同盟関係を結んでいない、さらに外部の地域であった。帝国を築くまでに強力な軍事力を持つに至った秦やマケドニアやローマが、それぞれ、高い文明を築いた政治的多中心社会のはずれに位置した事実は、周辺地域に伝播していくのが、「文明」の内容として富の蓄積と深い関係にあるいわゆる文化水準の高さより、地理的知識や、政治、軍事上の知恵や技術であること、そして軍事的に強力な共同体を築き戦争をして獲得できる栄華がどのようなものであるかという知識であることの証明かもしれない。

このようにして、政治的多中心社会のはずれに位置しやがて広大な帝国を築くに至った秦、マケドニアやローマが、政治的多中心社会の最盛期に生んだ文明を世界に広める役割ははたしたけれども、それ以上に高めることがなかった事実は、政治的多中心社会の持つ、もうひとつ重要な性格を我々に教えてくれる。

これらの巨大な帝国は、富の蓄積や人間の集中という面では、多中心的であった時代のレベルをはるかに凌駕することができた。しかし自由な創造力を保証するのはこうした集中度以外に、多様な精神活動が許される場が与えられていることと多様な素材、つまり歴史的社会的ドラマに他ならない。ポリス社会では、たとえ自分の所属するポリスで批判され、市民権を剥奪されても、そのポリスを離れるならば、生活の保証のある限り自由に活動できた。戦争に妨げられなければ全地中海沿岸から黒海沿岸まで、およそギリシア人が商取引きに進出しているところならどこにでも旅行できた。すぐれた戦略家や思想家には、出身国以外でもその考えを実際に応用する場が与えられたのも、春秋戦国時代の中国、ポリス社会や中世末から近代はじめにかけてのイタリアでは起り得た。しかし政治的多中心社会におけるこうした文化的創造力は、そのままでは直接、社会変動の要因となり得たとは思えない。思想が文字となって大量にコピーされ、多くの人々に早く伝わり、社会運動と結びつくには、西欧近代の幕開きを待つ必要があった。

冒頭で触れたように、今日の発展途上国の近代化を考えるには、近代の西欧社会を引合い

に出さざるを得ない。しかし近代の西欧社会は、中世にも増してダイナミックな変転を遂げており、地域差の点で、文化的にも政治制度についても極めて多様である。西欧社会の多中心性の基盤である「国民国家」という制度と理念について考える場合、いったいどの国家が「典型的」国民国家なのか、「平均的」国民国家とはどのようなものか迷わざるを得ない。領土面積の差や人口の大小はともかく、軍隊の保持、警察権、貨幣の発行や外交権等、国家が独占すべき個々の権限について調べても、どれかが欠けている「国家」が存在する。それだけではなく、古い歴史を持つにもかかわらず、国土の一角に激しい独立運動を抱えている場合もあるし、ベルギーのように分裂の可能性さえ抱えている場合もある。従って社会動態上、最初から西欧社会を「国民国家群」社会として扱うべきで、「典型」や「平均型」を探すのは間違いであり、制度や理念の面でも多様かつ多中心的な社会だということを前提にする必要がある。しかし歴史に深く根ざしているこのような多様性を生んだ社会変化のすべてを論ずるのは、ここでは不可能である。そこで、政治的多中心社会としては、その形成期に大変ユニークな変動の要素が西欧社会に見いだせる点のみに絞って論ずることにする。そのユニークな要素とは、先に少し触れたが、印刷技術と紙の普及と宗教改革についてである。

ヴィッテンベルクの教会の扉に貼り出された「九十五カ条の論題」は、2週間以内に全ドイツに知られわたっていた¹⁰⁾。当時印刷所は、すでに、西欧だけでなくポーランドや北欧にまでみい出された¹¹⁾が、もしこれほど印刷術が普及していなかったなら、ルターの行為もあれほどまでに衝撃を与えなかつたに違いない。宗教改革運動は中世にも多くみられたが、この当時になると、改革者の教説は、正確に大量一といつても今日の比ではないが一に印刷され、早く多くの人々に読まれるようになり、運動の形態をも変えることになった。

宗教改革の諸潮流の中で、とりわけ注目すべきはドイツ農民戦争やミュンスターの千年王国が改革派の敗北に終ったあとで主流となったカルヴァニズムである。カルヴァニズムの世俗的禁欲主義と資本主義のエーツスとの深い関係はM. WEBERにより詳しく論じられているが、カルヴァニズムの政治運動への影響についてはさほど論じられていない。パウロ的な神と悪魔の対立というテーマをさらに深めたカルヴァンは、神学の体系も意味作用が完全に政治的であるような一種のプロパガンダに変えられることを知っていた。母国であるフランスで内戦が始ってからは、情勢に対応して次々に「キリスト教綱要」の改訂版を出したカルヴァンの、神と悪魔の戦いについての長い記述は、教説全体からすればむしろ中心思想とはいえないにせよ、「魂と肉体」という中世の僧院むけ二元論より、はるかに、フランスでの内戦や、ネーデルラントにおけるスペインに対する解放闘争が起っていた状況にふさわしかった。R. M. KINGDONは、当時の重要な政治運動の拠点となつた

ジュネーヴとロシア革命後のモスクワとの類似点をみい出している¹²⁾。1572年8月23日夜から24日にかけての「サンニバルテルミの虐殺」後、多くの難民の到着に対処したり、布教者の教育と各地への送り出しをしていたジュネーヴは確かに当時の西欧社会において、ローマ教会に対抗できる政治的イデオロギー的中心であった。改革が、教会と信徒の組織の改革でもあった点で、自治都市は、いわば規模の点で「手頃」な実験場を提供した。ハプスブルク家のスペインが西欧の大きな経済的中心のひとつとなっていたフランドルとネーデルラントにおいて、プロテstantoを弾圧し支配体制の軍事的強化をめざしていたときに、ジュネーヴは遠方の抵抗のセンターとなった。帝国の拡大に相続権を活用した中世的支配に対し、ネーデルラントの独立運動は、スイスに続いて、小自治体の連合による新しい国家的統合の誕生を生んだ。カルヴァニズムの教会組織は、ネーデルラントにおける独立運動の中心組織となり機能したのである。

国民的合意をつくり、共通の敵を表現できる言語体系と、戦争をも遂行できる強固な組織を、カルヴァンの教義体系と改革派教会が提供したこと、またそれがジュネーヴという都市を中心にしていた事実は、西欧社会の政治的多中心化に特別な意味を持つ。フランス革命に至るまで、中世イタリア都市国家の共和制モデルにとってかわり、新しい共和制のモデルをスイス連邦の諸都市が提供した。他方ネーデルラントも、政治的亡命者や宗教上の亡命者達を受け入れつつ、他国では印刷できないような書籍の西欧における一大出版センターとなった。

政治と宗教の関係は、今日においても動態社会学上重要なテーマである。それは、現状の客観的認識をそのまま言葉に出しても、合意をつくり共同行動を組織する呼びかけにはならない場合が多く、善と悪の区別をはっきり区別し対立させ、価値観を明確に含んだ言語体系が政治に不可欠であり、そこに形を変えた宗教が入りこむ余地があるからだ。もともと、個人の利害と集団の利害の接点を政治が提供しているのであり、無教会主義は別として、教会という集合の場を持ちつつ個人の救済を求める宗教の領域は、政治の領域と、いまだに一部分重っており、少くともパターンは類似している。しかし政治は現実的で具体的であることをめざし、宗教ことにキリスト教に関する限り超越的普遍的であることをめざす。従ってもし政治運動や社会運動に宗教的言語体系が使用されているとするならば、それはその言語体系が、明確な価値観を提供し、運動の普遍性の証明を与えることを意味する。とりわけ人命にかかわるような激しい闘争が強制でなく自主的に組織される際には、救済概念を含む、宗教的言語体系が使用されるのである。西欧社会は、外部からの侵入に対し、キリスト教を、社会的収斂をうながす、抵抗への動員の言語として使用し、近代国家の独立や成立の際にもキリスト教の伝統から、必要な言語体系をつくり出した。そして教会と信者の組織は、後の政党や政治組織のプロトタイプとなった。

IV. おわりに

西欧社会に今日に直接つながる政治的中心が確立されるとともに、世界進出が開始され、やがて地球の表面を西欧を中心とする有限な空間に変えてしまった。この世界進出の過程で、西欧社会は産業革命を成しとげ、市民革命によって国民主権制を確立し、相互承認にもとづく政治的多中心社会を形成してきた。政治的中心は同時に文化や経済上の中心である場合が多いが、反面、多中心化は、社会の隅々にまで進行しており、単に政治の領域に限られない。

この「国民国家群社会」の文明は、西欧の世界進出とともに広まった。しかしこの文明は、特定の条件のもとに伝播し、とり入れられていく性格のものであり、まず最初に政治制度と軍事組織及び技術が伝わったといえる。

政治的多中心社会の成立とともに、地域社会は個有の条件のもとでその発展をとげるわけであるが、その社会変動の要素として、あるいは動因として四点にわたりこれまで論じてきた。第一に、政治的多中心社会は、その不定形な広がりにもかかわらず、文化的あるいは宗教的凝集力が働いている限りにおいて対象化が可能であり、また中心間の関係の密度が、この社会に別の凝集力と同時に、存続にかかる大きな変動の原因をつくること。第二に、内政と外交は大変密接に結びついているし、同様に問題となる地域社会の外にある政治的中心との対立関係、とりわけ軍事的衝突の結果は、地域社会内部における、この衝突を起した国の地位を左右すること。対外戦争の結果が、ヒエラルキーの構造を大巾に変え、権力の強化や弱体化にとどまらず、政治制度の存続、改革にかかること。第三として、政治的多中心社会の文化的創造力が、人間の往来と多様な活動の場、実験実証の場が保証されている状況から生ずること。第四として、ひとつの政治的中心をつくるために、人々の合意を形成し共同行動に向わせる明確な価値観を含み、なおかつその行動が普遍的根拠を持つことを証明している言語体系が存在してはじめて、政治運動が能動的に組織されること、また、紙と印刷術の普及が西欧近代においては大きな役割を演じたことを述べた。別の言葉で表現するならば、この印刷術の普及の問題は、世論形成や情報の伝達伝播の分野で技術的進歩が社会変化の要因となる事実の一例にすぎないが、近代の近代たる所以のひとつがここにあるといえる。

社会動態学を構築する場合の根本的困難は、これが決して閉じた体系であってはならないことである。古代の社会変動の原因のうちあるものは今日でも同様、みい出されるに違いないが、一方で科学技術上の進歩、地球環境の変化は日日新しい変動因を生み出すといってさしつかえない。その意味で、新興国家群により形成されつつある地域社会は、「進化途上」にある過去の產物ではなく、一方で全く新しい変動因の誕生に振回されながらも、先進国社会が、激しい社会変動の中で克服してきたことや克服できなかったことを一挙

に理解せざるを得ない立場に置かれた、人類史にとっての新しい大きな実験場である。ここで論じてきた事柄が、この新しい情勢に対応できる社会動態学の構築へのささやかなワクステップとなればさいわいである。

注

- 1) BENDIX, R.: "NATION-BUILDING AND CITIZENSHIP" Berkeley, 1977
河合秀和訳『国民国家と市民的権利』I. II 岩波現代選書, 1981, 卷I, p. 2
- 2) PARSONS, T.: "SOCIETIES: EVOLUTIONARY AND COMPARATIVE PERSPECTIVES" New Jersey. U.S.A., 1966
- 3) BALANDIER, G.: "SENS ET PUISSANCE" P.U.F. Paris, 1971, p. 72
- 4) アリストテレス:『政治学』岩波文庫版, p. 34~35
- 5) WEBER, M.: "WISSENSCHAFT ALS BERUF" 1919
尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫, p. 56
- 6) トゥーキュディデース:『戦史』岩波文庫版, 卷一の(3)
- 7) 同上, 卷二の(14)-(16)
- 8) 同上, 卷一の (98)
- 9) 具体的記述はペロポネソス戦争開始から21年目に入ったところで中断されており, その続編はクセノフォン『ヘレニカ』にみられる。
- 10) FEBVRE, L./MARTIN, H.-J.: "L'APPARITION DU LIVRE," Paris, 1971, p. 404
- 11) *ibid.*, p. 258~265
- 12) KINGDON, R. M.: "GENEVA AND THE COMING OF THE WARS OF RELIGION IN FRANCE 1555-1563" Genève, 1956. "GENEVA AND THE CONSOLIDATION OF THE FRENCH PROTESTANT 1564-1572" Genève, 1967

Essai sur la Dynamique de la Société Polycentrique

Hiroshi TAKANO

Faculté des Etudes Générales

Université d'Okayama pour les Sciences Naturelles

1-1, Ridai-cho, 700 Okayama-shi, JAPON

(Reçu, le 30 Septembre 1986)

Aujourd'hui, les sociétés politiquement polycentriques surgissent sur les zones décolonisées. Elles ne trouvent pas encore leur force interne de convergence. Pourtant, elles se distinguent de l'extérieur par le niveau socio-économique et culturel, par la densité des rapports rarement amicaux mais souvent conflictuels et par les caractères dramatiques des problèmes graves qu'elles doivent envisager.

Présent travail s'oriente vers la construction de la dynamique de la société polycentrique en matière des sociétés historiques telles que la Grèce antique et la société occidentale au temps moderne. Quatre éléments sont choisis pour cela à savoir, premièrement, les composants de la force convergente de la société polycentrique, deuxièmement, les rapports entre la politique intérieure et la politique extérieure, troisièmement, la créativité culturelle de la société polycentrique et enfin, l'existence du système de langage qui permet de structurer la vision du monde et d'organiser les actions communes.

Ces quatre éléments de la dynamique sont à la fois les clefs pour l'analyse de la transformation de la société des pays en voie de développement et les repères des obstacles pour la modernisation.